

I LOVE 始良ぶ 農業

第53号
令和7年1月発行

編集・発行 / 始良・伊佐地域振興局 農林水産部 農政普及課 [始良市加治木町諏訪町12 ☎0995-63-8215]

新規就農者の支援について

当振興局では、管内で就農して間もない新規就農者や青年農業者の方々に対し、始良地区の指導農業士（青年農業者の育成・確保に指導的な役割を果たしている方を市町村長からの推薦をもとに知事が認定した方）や関係機関と連携し、様々な支援を行っています。
今回はその取組を一部紹介します。

励ましの会を開催

7月25日、霧島市、始良市、湧水町の新規就農者6人を対象にした「励ましの会」を振興局で開催しました。出席者らは就農の動機や農業への思いを述べたほか、当日開催の研修会で振興局からはプロジェクト活動の取組、各市町からは施策等説明がなされ、その後の懇親会では活発な情報交換もなされました。



農業基礎講座を開催

農業技術の基礎知識の習得と相互交流を目的に「農業基礎講座」研修を開催しました。
8月9日と9月25日は、農業複式簿記に関する基礎研修を農業簿記ソフト会社と振興局が、9月19日は土壌肥料、農業機械・農作業安全、病害虫防除の3テーマを振興局各担当が説明しました。



農場巡回訪問を実施

12月に霧島市と湧水町の新規就農者を指導農業士と関係機関で訪問しました。新規就農者による経営概況・目標の説明後、指導農業士から農業経営での役割分担や機械化による効率化・労力確保、積極的な研修会参加による情報などの助言がありました。新規就農者も互いの農場や課題を認識する機会となりました。



部門研修を随時開催

4専門分野の部門研修を随時実施しています。
11月28日の園芸・有機部門では国分物産館の取組、指導農業士会長の就農体験談講話及び収入保険等について、12月12日の畜産部門では経営に必要な記録について指導農業士の講演、自給飼料作の室内・現地研修を行いました(作物部門は1月23日、茶部門は2月14日に開催予定)。

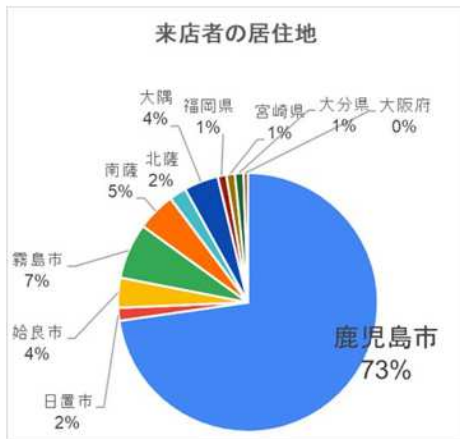


消費者アンケートの結果報告

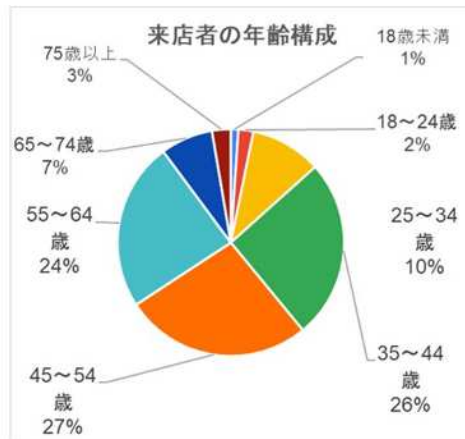
～オーガニックフェスタかごしま2024～

11月23日（土）に開催された「オーガニックフェスタかごしま2024」に参加し、有機農産物に対する消費者の意識調査を行いました。消費者の意識やニーズを知ることは、市場の動向に応じた生産活動を行うための重要な手がかりとなります。この調査結果から得られる情報をもとに、有機農産物の消費拡大をさらに進めるためのヒントになれば幸いです。

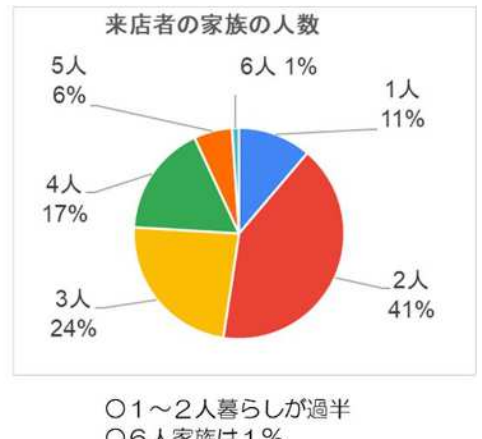
※オーガニックフェスタ：有機農業・自然農法等のオーガニック食品の普及を柱に、「私たちの住む地球環境を見つめ直し、持続可能なライフスタイル」を提案するイベント



○鹿児島市が73%



○25～54歳は約6割



○1～2人暮らしが過半
○6人家族は1%

※「霧島有機社中」出店ブースで調査

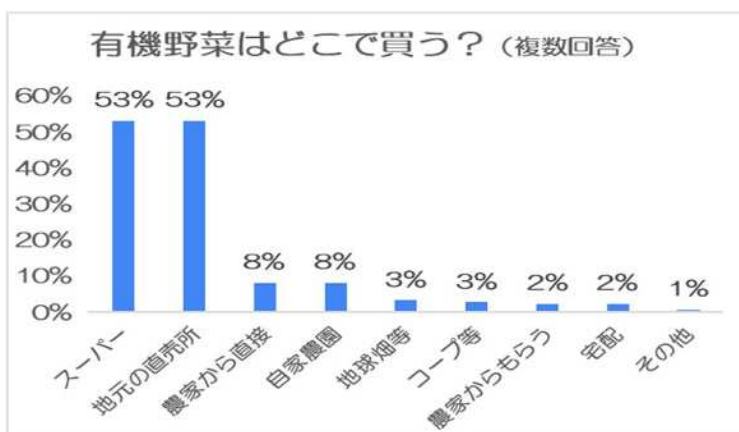
野菜を食べる頻度と有機野菜を食べる頻度

○野菜を食べる頻度（人）

頻度	人数	割合
毎日	166	89%
週に3～5回	14	
週に1～2回	6	
あまり食べない	1	
総計	187	

○有機野菜を食べる頻度（人）

頻度	人数	割合
毎日	32	19%
週に3～5回	47	75%
週に1～2回	46	
あまり食べない	41	
まったく食べない	2	
総計	125	



○アンケート回答者187人中、野菜を毎日食べるは166人(89%)
○「野菜を毎日食べる」のうち有機野菜を毎日食べるは32人(19%)
○「野菜を毎日食べる」のうち有機野菜を週1回以上食べるは125人(75%)

○スーパーと直売所での購入が多い
○自家農園や農家からの直接購入あり
○有機野菜は宅配もあり約2%(4人)

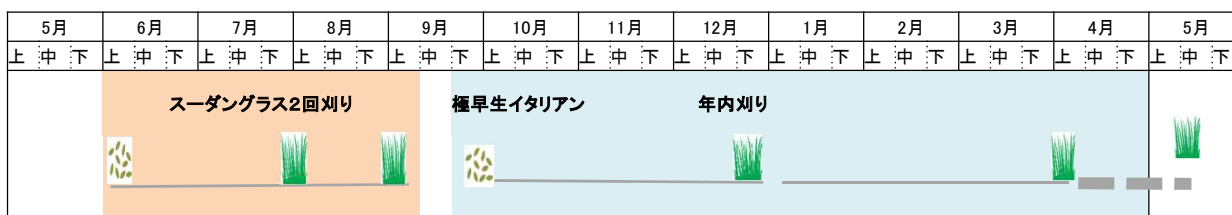
野菜をよく食べる人は有機野菜もよく食べ、購入先はスーパーや直売所が中心で専門店や宅配の利用は少ない

自給飼料増産に向けた現地実証ほの取組

世界情勢の不安定化により、配合飼料や輸入乾牧草の高騰が続く中、飼料価格の変動等のリスクを減少させる観点から、**自給飼料生産の拡大が喫緊の課題**となっています。そこで、当局では、国や県の事業を活用し、飼料自給率の向上を目的とした地域に適した自給飼料増産の支援に取り組んでいます。今回は、2つの取組概要について紹介します。

1 肉用牛畑作地域での取組

肉用牛繁殖経営農家においては、イタリアンライグラス等を中心としたロールバール体系の飼料生産が主であることから、夏作スーダングラス、冬作イタリアンライグラスの作付体系（図1）の実証に取り組みました。



（図1）畑作での多収体系の取組イメージ

夏作のスーダングラスは、3品種の品種比較を行い、1番草、2番草合計で7～8t/10aの生草収量を確保できました。冬作の極早生イタリアンは、2品種を作付けし、年内に1～2t/10aの生草収量がありました。

今後、春先及び5月まで収穫予定ですので、年間15t/10a前後の収量を確保することが可能な体系として推進を図っていきます。



写真1 現地検討会（霧島市）

2 肉用牛水田地域での取組

水田地域においては、極短穂茎葉型飼料用イネ（WCS専用品種）の「つきすずか」の推進とその後作にイタリアンライグラスを作付けして自給飼料増産体系を検討しました。

本年は、9月13日に飼料稲の収穫前にドローンによる播種（立毛播き）の試験を行い、省力化を図る技術について検討を行いました。また、同日、草地種子協会から講師を招き、飼料用稲の研修会を実施し、食用品種ではなく専用品種（中でも極短穂茎葉型飼料用イネ）を作付けする優位性を学ぶことができました。

※ 極短穂茎葉型飼料用イネとは、飼料用専用品種の中でも、モミの割合が10～15%（従来型がモミ割合50%）と少ない品種で栄養がモミではなく茎葉に多く残る特徴がある。



写真2 ドローンによるイタリアンライグラスの立毛播き（湧水町）

冬季の 耕うんで ジャンボタニシ を減らしましょう！

1 ジャンボタニシ（正式名称：スクミリンゴガイ）の越冬について

参考：スクミリンゴガイ防除対策マニュアル

- 14℃以下では活動を停止し、休眠（越冬）する。
- 寒さに弱く、ほ場や用排水路で土中に潜って越冬する。越冬個体は約8割が地表から深さ6cm以内に分布する。
- ほ場では、収穫後に稲わらがあると、温床果で越冬率が高まるとされる。



2 冬季の対策について

時期	目的	作業内容	作業のポイント
1月～2月	殺貝	ロータリー耕の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・ロータリー耕の碎土で、貝を粉砕する。(6cm程度の浅耕で可) ・厳寒期に耕起することで貝を地表面に露出させ、寒気で死滅させる。 ・耕起は数回行うと効果的。 ・耕うん時は走行速度を遅く、回転数を早くする。



ポイント

厳寒期前のロータリー耕うんによりスクミリンゴガイを物理的に破壊するとともに寒風にさらす。



ジャンボタニシは、水稻などに被害を及ぼすため、1年を通じての防除対策が必要です。特に、冬季は対策として重要な時期になりますので、参考にしてください。

根深ねぎ生産者の皆様へ（病害虫情報）

「ねぎ葉枯病」は、R5年作（R6年冬春期）に発生が多く見られ、R6年作（R7年冬春期）においても発生が懸念されますので、ご注意ください。

- ※発病適温：約20℃
- ※病原菌：ステンフィリウム
- ※秋の症状は黒斑病によく似ています（写真1）。

※秋冬期の防除が不十分だと、冬でも気温が高い場合、写真2の様な黄斑症状が出ます。

- ※ねぎ葉枯病は、葉先枯れ症状、黒斑症状、黄斑症状と、様々な症状を示します。
- ※黄斑症状はネギアザミウマの吸汁痕とそっくりですので要注意です（写真2）。



写真1 葉先枯、黒斑症状



写真2 黄斑症状（R6.2月下旬）

【効果の高い農薬】

オンリーワンフロアブル(F3)、テーク水和剤(F3・FMO3)、アミスター20フロアブル(F11)、メジャーフロアブル(F11)、パレード20フロアブル(F7) 等

注) 病害虫に薬剤抵抗性を生じさせないため、上記農薬のラックコード（（ ）内の数字等）を参照し、同じ番号の農薬の連用を避けるようにしましょう。